

自由論題2、報告2

報告テーマ

清末出版界はどのように中国の近代化に貢献したのか

—『農学報』と羅振玉を中心とする考察—

The Contribution of Late Qing Publishing to the Modernization of China:
A Study on Journal of Agricultural Sciences (*Nongxue bao*) and Its Founder Luo Zhenyu

氏名(所属)

南 岳(北海道大学博士後期課程)

NAN Yue(Hokkaido University)

要旨(800字程度)

1895年日清戦争で敗戦した中国は日本に強く刺激を受け、中国人の日本観に根本的な変化が生じた。日本の新聞や書籍の翻訳が多く出版されるようになり、中国訳日本書の第一次ブームが起こった。多くの新聞や雑誌が発行されるなか、羅振玉が創刊した『農学報』は特別な存在となった。

1897年5月に羅振玉は中国最初の農学専門雑誌『農学報』を創刊し、1906年1月に停刊するまで、9年近く合計315号が出版された。外国農学書誌の翻訳を主な内容としている『農学報』は、戊戌の変法(1898年)前後に中国人によって創刊された数多くの雑誌の中で一番長く続けられた刊行物と言える。農学啓蒙を主たる目的とし、農学の「他は取り上げない」、また「論説を載せない」という方針を持っており、政治に関与しないことを表明した。当時維新運動が隆盛し、政治関連の刊行物が次から次へと創刊される中、『農学報』は専門知識を重んじる異色の刊行物だったといえる。

よって、ここではこのような自然科学分野での知識の流入、受容と出版メディアが果たした役割を解明するため、『農学報』の記事とその創刊者であった羅振玉の論説を取り上げる。研究方法は、一次資料を絞り込み、数値的な側面と内容面の確認を行い、具体的に、『農学報』の編集方針、読者層、発行状況を考察し、『農学報』の受容状況、影響範囲を確認する。次に、記事の表題の分析から、欧米、日本の翻訳記事の掲載量の変遷をたどり、翻訳記事の出所を確認し、日本が与えた影響の拡大を検証する。その上で、『農学報』の翻訳記事を分類し、その内容が蚕糸業、水産業をはじめとする付加価値の高い産業に集中している傾向を示す。最後に、羅振玉の論説など具体的なテキストの分析から、羅振玉が『農学報』を通じて、日本をモデルにし、「富国」の思想を実現しようとしていたことを再確認し、『農学報』が果たした役割を明らかにする。